

ともに生き、ともにはたらく～

2021協同集会in東海実行委員会

ツナギナオス

「協同による新しい日常」

2021協同集会in東海



全体進行 中野京子（生活クラブ生協あいち）

10:00	「今、私たちは」 藤井 恵里（愛知W.Co連合会）	12:00	休憩 13:00まで
10:10	「協同による新しい日常とは」 向井 忍（地域と協同の研究センター）	13:00	「つながる力と多様性」 向井 清史（名古屋市立大学大学院特任教授）
10:30	クロストーク①「つなげる力を育む」 【ファシリテーター】 ・岡田 俊介（ワーカーズコープ） ・小林 啓示（ワーカーズコープ） 【報告・発言】 ・藤澤 秀機（マルベリークラブ中部） ・森川 美保（季の野の台所） ・小楠 修平（ワーカーズコープ） ・橋本 吉広（地域における子どもの学びの支援共同研究会） ・熊崎 辰廣（岐阜農民連） ・菱川 智恵（子宝のさと） ・向井 忍（地域と協同の研究センター）	13:20	クロストーク②「多様性をいかに」 【ファシリテーター】 ・藤井 恵里（愛知W.Co連合会） ・神田 すみれ（地域と協同の研究センター） 【報告・発言】 ・神田 すみれ（地域と協同の研究センター） ・岡田 俊介（ワーカーズコープ） ・熊崎 辰廣（岐阜農民連） ・荻野 直人（わっぱの会） ・山田 れいな ・山口 晋一（やまがたフットパス実行委員会）
		14:50	「これからに向けて」 岡田 俊介（ワーカーズコープ）
		15:00	閉会

主催：2021協同集会in東海実行委員会

後援：愛知県、三重県、名古屋市、瀬戸市、尾張旭市、日進市、長久手市、小牧市、知多市、岩倉市、豊田市、中日新聞社

協賛：愛知県高齢者生活協同組合、NPO法人わっぱの会、生活クラブ生活協同組合あいち、南医療生活協同組合、

特定非営利活動法人ワーカーズコープ東海事業本部、日本社会連帯機構東海地方委員会、生活協同組合コープあいち、生活協同組合コープぎふ、生活協同組合コープみえ、愛知ワーカーズ・コレクティブ連合会

開会挨拶

2021 協同集会in東海

ともに生き、ともにはたらく

ツナギナオス
「協同による新しい日常」

実行委員
愛知ワーカーズ・コレクティブ連合会
藤井恵里

いま、私たちにできること

コロナ禍で孤立や分断が深刻化

新型コロナウイルス感染のパンデミックは、これまで社会に潜在していた課題をさらに深刻に、そして表面化させています。多くの人々が仕事を失い、格差や貧困は増大し、命までもおびやかされています。失ったものは、将来の夢や、やりがいのある仕事だけでなく、社会や地域に対する信頼関係さえもみるみる失われ、逆に、将来への不安や絶望、失業や不安定雇用、社会や地域に対する不信感が上回り、特に、若者や女性への影響が大きく、孤立や分断は深刻さを増し生きづらさは加速する一方です。

もともと潜在していた社会の弱さ、つながりの脆弱性がコロナで露になり、あったはずのツナガリがあっという間に解けてしまったかのようです。

むしろ、ツナガッていたつもりだけだったのかもしれない。

生産性を求める効率優先の資本主義の考え方は、人や地域や文化さえも同じ枠にはめ込む画一的な社会を生みだします。違い（多様性）があると規格外とされ、分断や排除の対象となります。

同調圧力が強まる要因にもなっているのではないのでしょうか。

そんな社会のありように抗い、
自分らしく、人らしく生きていくためには

いま、私たちにできること

規格外ではなく、それは多様性（みんなちがって、みんないい）

人々がもつ多様な力をどうツムギ、ツナギナオスことで、心豊かに暮らせる地域社会にしていけるかが問われています。

多様性を認め合い、互いに支え合い、たすけあう「協同の力」で、社会や地域との信頼関係を取りもどし 社会の構造を変え、市民自治の領域を拡げ、ともに生き、ともにたたく豊かな地域社会づくりを進めていくことが大切です。

そんな中で、

2022年10月1日に「労働者協同組合法」が施行されます。

「生き方」を表すのに一番わかりやすい表現としての

「働き方」を考えるきっかけにしていきましょう。

「協同というの営みの中で」

協同組合はそもそも、同じ思いを持つ人々の集まり

（共通のニーズや願いを満たすために自発的に手を組んだ自治的な組織）



みんなで作った一定のルール（規範）の中で活動が行われ

信頼関係やネットワークが生まれます

この繋がりや関係性は「社会関係性資本（ソーシャルキャピタル）」として

組織の外でも大いに活用されることで

まち（地域社会）づくりがさらに進みます



10月1日施行 「労働者協同組合」

労働者協同組合は、働く人々の協同組合です。

集まった全員で、出資をし事業所のオーナーとなり、運営と労働に参加する協同労働といわれる働き方で、地域のニーズに応える事業を非営利で行い、持続可能で活力ある地域社会づくりを目的とします。そこに資本家は存在しません。生産手段も生産物も組合員の共有財として位置づきます。

現在、10月からの円滑な施行に向けて政令・省令・指針が検討されています。

また、公益性の高い法人としての税制措置のための法律の一部改正も検討されており、実現すれば、NPO法人並の優遇措置の対象となります。

所管庁は都道府県となっており、今後、相談窓口等設置される予定となっています。

また、3人以上の発起人で届出だけで設立でき、地域に根差す小さい単位の協同組合が簡便に設立され、複数の協同組合間の連携でさらに豊かな地域づくりが進むことが期待されます。

構想と実行を分離しない豊かな働き方の選択肢が広がります

2021協同集会in東海で考えたいこと

1. 協同集会in東海のこれまで
2. 2021実行委員会で話し合ってきたこと
3. 2021協同集会in東海のテーマ

実行委員会 地域と協同の研究センター 向井忍

1、協同集会 in 東海のこれまで

●2014年9月 地域で発見。「協同ってなに？」

人に出会い、つながり、協同する

記念講演「無縁社会・老人漂流社会をこえて～見いだす希望・絆」
板垣淑子(NHKチーフプロデューサー)

●2017年10月 ともに生き、ともにはたらく

地域をつくり次世代へつなぐ

記念講演「病院もまちも、市民がつくる～おたがいさまのまちづくり」
成瀬幸雄(南医療生協代表理事)

●2019年9月 ともに生き、ともにはたらく

未来へつなぐ協同の再発見 私たちに今、できることは

オープニングディスカッション

「このまちで生きていく～くらす・はたらく・つながる明日～」
新城市(八名)・各務原市(八木山)・豊田市(保見)

※労働者協同組合法の法制化をめざす、全国協同集会のプレ企画としてスタート。

※2017協同集会では、地域の実践を支える“協同のプラットフォーム”の必要性が話題に。

※実行委員会の場でも相互理解と協同を促進することが目標になる。

※全国集会のプレ企画から、東海地域のつながりを促進する協同集会に(隔年で開催)。

※2020年12月、「労働者協同組合法」が成立。

※2021年4月、協同ではたらくネットワークあいち”発足。

2、2021 実行委員会で話し合ってきたこと

新型コロナパンデミックが襲う中で

①あたりまえとしてきた、協同（人と人がつながる行為）が“困難”に。

②社会は、人と人のつながり（相互関係）で成り立っていた！

- 学びとは：教わる側と教える側の相対する関係の中にある
- 医療とは：患者とその家族、医師と専門職、地域住民で支え合う関係性が不可欠
- 介護とは：一人ひとりの生活場をケアし、尊厳をまもっている
- 子ども食堂や学習支援とは：第三の居場所として、関わる人のそれぞれに役割がある
- 生産・消費とは：つくりて、届ける人、使う人のコミュニケーションで成り立っている。

③誰が“便利な社会”を支えていたのか

- 農業現場を支えていた人が日本にいとなくなると・・・
- 雇用が不安定になって真っ先に困難になる人たち
アルバイト、派遣、契約、外国人留学生、海外ルーツの労働者などである。

新型コロナ以前からの“社会変化”が顕在化

●急速な少子化の進行

2000年出生数119万人
2021年出生数80万5千人？

▲32%

想定より7年早く進む

結婚・出産・子育ての困難

コミュニティ・職場文化の多様化

●外国人労働者の受入

2000年 20.7万人
2019年 165.9万人(2.2%)

●実質賃金の低下

1997年＝100

2016年	スウェーデン	138.4
	オーストラリア	131.8
	ドイツ	116.3
	アメリカ	115.3
	日本	89.7



中間層がなくなる 格差拡大

オンライン化を促進 「高度人材」

●AI化（スマートフォン世帯普及率）

2010年 9.7%
2016年 71.8%

※新型コロナで明らかになった 社会の脆弱性

低賃金構造で維持されていた働き方

家族をささえ、地域で育てる
多様な人と文化を生かせる労働

3、2021 協同集会 in 東海のテーマ

ともに生き、ともにはたらく「**協同による**新しい日常」
ツナギナオス

○日常を大切に。「新しい日常」をつくる協同＝ツナギナオス

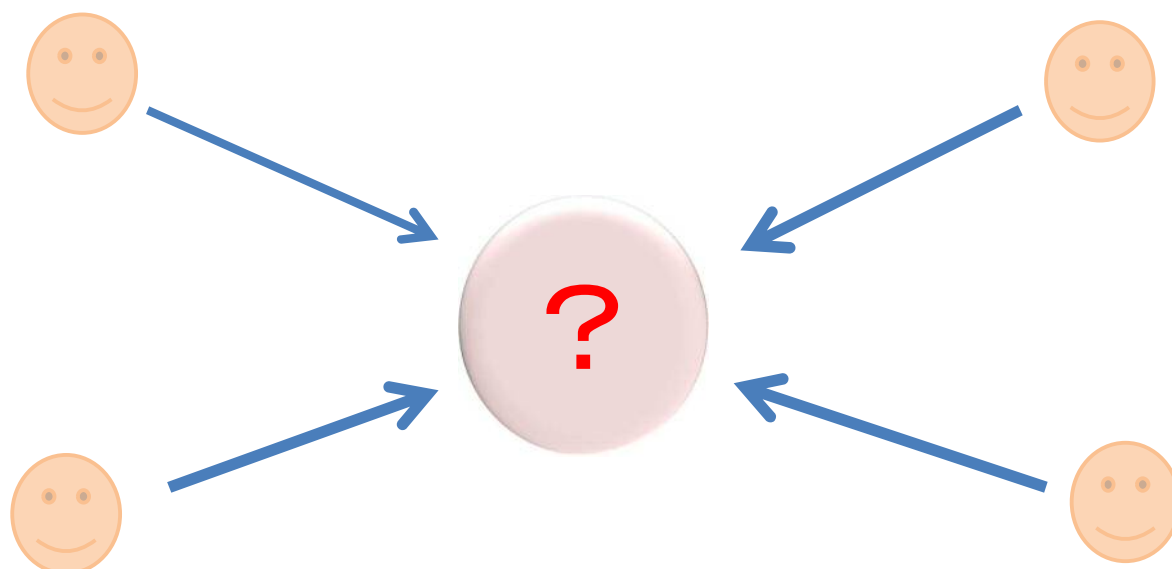
ー私たちは(このまちで)生きていく。
特別な誰かを待つのではない。

○環境の変化は、私たちの内側にも変化を生み出している。

ー変化しつつある私たちが、ありのままの力を生かせるには。
そのような社会/関係をつくる＝ツナギナオス協同。

各分科会の成果をもとに考える

クロストーク



クロストーク①「つながる力を育む」

ー新型コロナの影響が集中した次世代に焦点をあてて、**つながるための協同**（ツナギナオスための課題）について語ります。

- 秋の自然・生活体験
- 学校給食をオーガニックに
- 高校生世代における学習等支援の現状と課題を探る
- 学生・若者と協同を学ぶ

クロストーク②「多様性をいかす」

ー地域と労働の第一線に焦点をあてて、ともに働き・**多様性をいかす協同**（ツナギナオシている実践）について語ります。

- 多文化背景をもつ人たちによる多様な取組みと協同がもたらす新しい社会
- はたらくってなに？～働くを語り合おう座談会
- 地域の中で働くー小さな協同の実践と仕事創り
- 福祉・医療ネットワークと地域共生社会

協同する ツナギナオスには何が必要か

「多様性とつながる力」

○“どれをツナグのか”

情報、選択肢、社会資源。

○“つなギナオスことができる”

ヒント、補助線、生活を編集できる力。

今年10月に施行される「労働者組合法」は
“ツナギナオス働き方”の道標。

多様性とつながる力

名古屋市立大学名誉教授 向井清史

1.何故「生きにくかったり」、「働きにくかったり」するのか

現在産業社会に存在する二重の画一化、標準化圧力

- ①市場経済の拡大：比較基準が価格という一つの基準に集約される＝評価の画一化
- ②機械（資本の現実態）化：コスト低減のため機械に置き換え＝必要とされる能力の画一化、標準化

標準化による物理的効率性アップ VS 個性的存在としての人間

人に合わせて機械が動くのではなく、機械に合わせて人は働くことを求められる

＝自由に生きること（自己実現）と、物的に豊かになることを選択を迫られる。⇒雇われない働き方は、この関係から自立するひとつの選択肢（容易なことではない）

分断は、産業社会が多様性を取り込むための様式

- 標準化VS個性論理の延長線上に分断問題が生まれてくる。
- 産業社会の市場経済が自らにとって異質な多様性を飲み込もうとすると、分断、格差という様式をとる以外にない。
- 標準化条件を満たす小集団に分割（＝分断）したうえで、連結させる。⇒融合ではなく、モザイク的包摂
- 外国人労働者、農業、地方の問題（全て個性的）も同じ構図



市場が求める条件を満たさないものは周辺化される

2.自由に生きるということは、一人で生きていくことではない

- 一人でできることは限られる。

協同することで多面的能力が活かされ、開花する機会は多くなる。
自己実現できる機会が広がる。



午後のテーマ：多様性を受け容れつつ、市場でも生き残れる
「組織、働き方づくり」を学び合うこと

3.協働によって自己実現するには、自己決定（選択）力、自己編集力が前提になる。

協働労働を可能にするには、個人はそれに必要な能力を備えなければならない

＝受動的ではなく、主体的に課題を受け止める力



午前のテーマ：どのようにすれば、次世代にこのような能力を身につけさせられるかを学ぶ

個人に対して、これらの能力を社会的に保障することは人権の問題＝自己決定力を身に着けさせることは義務教育の最も重要なこと

- 2つの学び：選択肢を広げる学び→知識や技能の伝承

選択肢の中から自分に適したものの選び出す学び→自己の経験、取り巻く環境に対して固有の意味付け（整序化）を与え、それらの関係性を認識する能力＝経験編集力の涵養→学校外での様々な体験機会も含め、自ら判断力を養う機会を増やすことが必要

ともに生き、ともにはたらく～

2021協同集会in東海実行委員会

ツナギナオス

「協同による新しい日常」

2021協同集会in東海



クロストーク① 「つなげる力を育む」



秋の自然・生活体験活動「生活の中で工夫して自然を生かす体験」報告

日時：2021年11月28日（日）10：30～15：30

場所：季の野の台所（愛知県知多郡美浜町字布土豆池23）

参加：15名（中高生6名、大学生2名、大人7名）

11月28日、秋の自然・生活体験活動を季の野の台所（美浜町）にて実施、参加者15名（中・高校生6名、大学生2名、大人7名）の参加があった。

この体験活動は、NPO法人マルベリークラブ中部、繭のいろは、季の野の台所、ワーカーズコープで企画を行った。

■ そもそも何で体験活動？

今回の体験活動は、2014年から始まった協同集会 in 東海で自分たちが協同を実感できる行動を何かできないか？という藤澤さん（マルベリークラブ中部）の思いから始まり、NPO法人マルベリークラブ中部と関係する繭のいろは、季の野の台所を紹介頂き、体験活動の準備をした。準備の中で、団体同士の協同も深めることができた。

・生活の中で工夫して自然を生かす体験

2030年に欲しいもの（都会人約800人へのアンケートによる）

- 1, 安心安全な食=食の自給自足
- 2, 信頼できるコミュニティーの一員であること
- 3, 安心・良質な子育て環境

裏を返すと今、特に都会にないものに通じる事柄である。



地域の活性・再生の活動指針とする。

	テーマ	着眼点
1,	食の自給自足	休耕地の活用
2	信頼できるコミュニティー	CSA（協働）
3	安心良質な教育環境	学習支援



具体的検討グループ

NPO ワーカーズコープ、
季の野台所（美浜町市民団体）、
NPO マルベリークラブ中部

■ 活動の目的

体験活動は、コロナ禍により広がる子どもたちの体験・機会の格差縮小、自然の中に人も加わっているという意識を取り戻し、桑・蚕・繭の歴史的歩みを辿りつつ、ヤギ等の多様な命に触れ、他者への感謝の気持ちを再認識すること、自然循環のものづくりを体験し、子どもたちが生活の知恵を学び、自らの役割と協同を実感することを目的とした。

■ 体験活動の内容 ※集会当日に森川さんより詳しく報告

・野外体験（田んぼでヨガ）

→みんなで体をうごかし緊張がほぐれる!?

・創作活動（桑・蚕・繭のはなし、ミサンガづくり）

→子どもたちは、真剣な様子で話を聞いていた。実際に蚕や繭にも触れて、自然の循環について学んだ。大学生も一緒にミサンガをつくる。

・調理体験（バームクーヘンづくり、海鮮バーベキュー）

→火をおこし（子ども・大学生も上手につけることが出来ず。）、薪割（大人がハマル）

→バームクーヘンづくり（竹きり、生地・生クリームづくり、焼く作業）

活動内容は、集会当日に森川さんより報告があるが、大人が全て準備するのではなく、子どもたち自身が、準備や片づけを行う体験となった。

火おこしは、参加者では上手につけることが出来ず。火おこしの難しさを知った。調理体験では、子どもが大学生や大人に作り方など教える場面も見られた。（場が変われば、立場が変わる。）

■ 参加者の感想 一部

・中学３年で、最後の機会と思い参加した。すごく楽しみにしていた。参加者同士で普段できない会話もでき、良い体験ができた。（中３）

・薪割りをして、できた時は凄くうれしかった。（中２）

・自然体験ということで何も知らない土地の自然で全力で楽しむことの重要性を感じることができた。今まで学習会の中でしか関わりを持っていなかった子どもたちが自然に触れることで新しい一面を見ることができた。（大学生）

・薪割りや竹などを触り、自然にふれ、優しい心が皆に見えた。いつもある日常と異なることを行う時間は、人間の成長に必要不可欠であると再認識することができた。私が教師となり、多くの学びを伝えていくが、学校外から学ぶことの大切さを多くの方と共有していきたいと考えている。（大学生）

※子どもたち・大学生の感想から、体験活動の中でも、みんなで協力（協同？）して行ったバームクーヘンづくりが一番楽しかったとの感想があった。日常で、何か一つのことをみんなで協力して行う体験が少ない？意識していない？からか。

様々な体験、準備、ものづくりの中で、子ども同士、子どもと大学生、大人と協同する良さを感じることができたのではないかな。

その後、子ども・大学生の変化（やりたいこと、やれることを言える。関係性が深まり。高校生が学習会に参加など）に繋がっている。

■ 今後の目標と課題

体験活動後に振り返りを行い、参加者の感想から、今後も体験活動を継続したいという話になっている。継続のためには、体制づくりやプログラムの充実、資金の確保が必要。

	項目	着眼点
1	継続の為に体制づくり	・賛同団体への勧誘 ・ボランティアの募集(CSA の活用)
2	プログラムの充実	・地域の文化の掘り起こし
3	地域と連携する展開	・自治体との連携 ・名古屋周辺地の任意団体との連携

秋の生活・自然体験活動 報告

生活の中で工夫して自然を生かす体験



2021協同集会in東海
体験型分科会

秋の生活・自然体験活動

• 体験活動 実施状況

日時：2021年11月28日（日）

場所：季の野の台所（チャットに紹介動画リンク貼り付けています！）

参加人数：15名（中高生6名、大学生2名、大人7名）

ワーカーズコープが運営する学習会に参加する子ども・大学生を対象

そもそも何で分科会で体験活動…？

今回の体験活動は、2014年から始まった協同集会in東海で**協同を実感できる行動をできないか？**というNPO法人マルベリークラブ中部、藤澤さんの思いから始まり、繭のいろは、季の野の台所をご紹介頂き、体験活動を企画しました。
これまでも、それぞれの活動に参加することはあったが…。

体験活動の目的

- ・ 体験活動は、コロナ禍により広がる子どもたちの体験・機会の格差縮小
- ・ 自然の中に人も加わっているという意識を取り戻し、桑・蚕・繭の歴史的歩みを辿りつつ、ヤギ等の多様な命に触れ、他者への感謝の気持ちを再認識する
- ・ 自然循環のものづくりを体験し、子どもたちが生活の知恵を学び、自らの役割と協同を実感すること

体験活動の内容

- ・ コロナ禍により広がる子どもたちの体験・機会の格差縮小のため、体感型農業を営む「季の野の台所」で桑・蚕・繭に物づくりや生活体験を行いました。

詳しくは、森川さんより報告があります！
野外体験(ヨガ)
創作活動(ミサンガづくり)
調理体験(バームクーヘン・海鮮BBQ)



季の野の台所
ホームページ



企画をみんなで考えて



2030年に欲しいもの(都会人約800人へのアンケート)

- ① 安心・安全な食=食の自給自足
- ② 信頼できるコミュニティに一員であること
- ③ 安心・良質な子育て環境

裏を返すと、今、特に都会にないものに通じる事柄



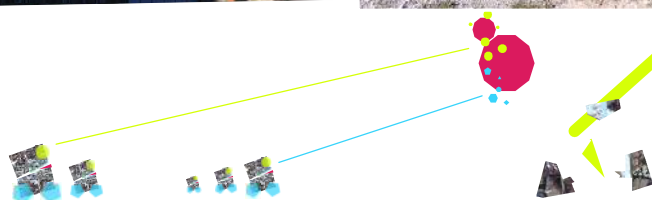
- | ■ テーマ | ■ 着眼点 |
|---------------|-----------|
| ① 食の自給自足 | ① 休耕地の活用 |
| ② 信頼できるコミュニティ | ② CSA(協働) |
| ③ 安心・良質な教育環境 | ③ 学習支援 |

具体的検討グループ

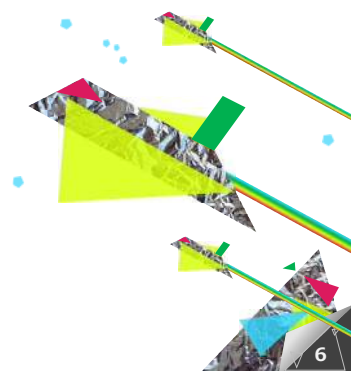
NPO法人マルベリークラブ中部
繭のいろは
季の野の台所
NPO法人ワーカーズコープ



季の野の台所 生活の知恵がいっぱい



野外活動(田んぼでヨガ)…みんなでヨガをしてリフレッシュ！



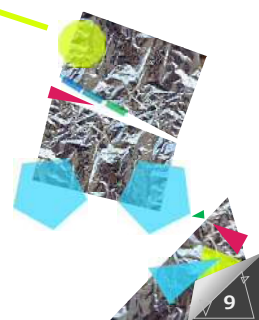
桑・蚕・繭のお話 ミサンガづくり



調理体験準備！ 火おこし、薪割



調理体験 バームクーヘンづくり



参加者の感想

- 中学3年で、最後の機会と思い参加した。すごく楽しみにしていた。参加者同士で普段できない会話もでき、良い体験ができた。(中3)
- 薪割りをして、できた時は凄くうれしかった。(中2)
- 自然体験ということで何も知らない土地の自然で全力で楽しむことの重要性を感じることができた。今まで学習会の中でしか関わりを持っていなかった子どもたちが自然に触れることで新しい一面を見ることができた。(大学生)
- 薪割りや竹などを触り、自然にふれ、優しい心が皆に見えた。いつもある日常と異なることを行う時間は、人間の成長に必要不可欠であると再認識することができた。私が教師となり、多くの学びを伝えていくが、学校外から学べることの大切さを多くの方と共有していきたいと考えている。(大学生)

※子どもたち・大学生の感想から、体験活動の中でも、みんなで協力(協同?)して行ったバームクーヘンづくりが一番楽しかったとの感想があった。日常で、何か一つのことをみんなで協力して行う体験が少ない?意識していない?からか。



今後の目標と課題



NPO法人マルベリークラブ中部

繭のいろは

季の野の台所

NPO法人ワーカーズコープ

体験活動後に振り返りを行い、参加者の感想から、今後も体験活動を継続したいという話になっている。継続のためには、体制づくりやプログラムの充実、資金の確保が必要。

1 継続の為に体制作り

・賛同団体への勧誘 ・ボランティアの募集(CSAの活用)

2 プログラムの充実

・地域の文化の掘り起こし

3 地域と連携する展開

・自治体との連携 ・名古屋周辺地の任意団体との連携



ご清聴ありがとうございました



自然を工夫して生活の中に活かす体験会の実施

2030 年に欲しいもの（都会人約 800 人へのアンケートによる）
1, 安心安全な食=食の自給自足
2, 信頼できるコミュニティーの一員であること
3, 安心・良質な子育て環境
裏を返すと今、特に都会にないものに通じる事柄である。



	テーマ	着眼点
1,	食の自給自足	休耕地の活用
2	信頼できるコミュニティー	CSA（協働）
3	安心良質な教育環境	学習支援



具体的検討グループ：NPO ワーカーズコープ、季の野の
台所（美浜町市民団体令和 4 年桑苗 300 本植栽）:繭のい
ろは、NPO マルベリークラブ中部

プログラムの設定

- ・ヨガ体操、火起こし、薪割り、竹材によるバウムクーヘンづくり、海鮮バーベキュー、
- ・桑・蚕・繭のはなしと活用〔ミサガづくり〕

場所：知多郡美浜町字豆池地内 季の野の台所施設
活動時間：AM:10~PM 3

今後の課題と目標

	項目	着眼点
1	継続の為に体制づくり	・賛同団体への勧誘 ・ボランティアの募集(CSA の活用)
2	プログラムの充実	・地域の文化の掘り起こし
3	地域と連携する展開	・自治体との連携 ・名古屋周辺地の任意団体との連携

学校給食と地域

協同集会in東海 分科会報告

分科会：学校給食をオーガニックに

協同集会イン東海 分科会

学校給食をオーガニックに 報告 12月19

報告者 熊崎

当日のプログラム（PM1:30～4:30）

1. グリホサートとネオニコチノイド：農民連分析センター**八田純人**さん
2. 「学校給食をオーガニックに」署名活動の報告：**菱川智恵**さん
3. 有機農業を進めるために：**服部晃**さん（給食ネットワーク代表）
4. 白川町学校給食用食材の生産：**長谷川泰幸**さん（ゆうきハートネット）
5. 有機野菜の配送：**亀山正法**さん（未来の給食をつくる♡ぎふ代表）
6. 生活クラブ生協の実践：**中野理事長**

三つのテーマの輻輳

・「学校給食をオーガニックに」のテーマでは、「**学校給食**」、「**有機農業**」そのものの課題と、それが重なる「**オーガニックへ**」という三つが輻輳し、どこに重点を置くかで議論が代わりますが、今回の報告では特に署名活動から始まる「**オーガニックへ**」に重点を置きます。（ネオニコチノイドやグリホサートなど農薬や慣行農業に対する有機農業の課題については、後日八田さんや服部さんの報告をもとに、白川町で実践や亀山さんのプロジェクト、また生活クラブ生協の報告も含め報告書を作成する予定です）

- ・ただ、八田さんが言及した「**市民科学**」という視点は、事実に基づく市民運動を進めるためには欠かせないものです。本来なら公的な機関や大学などに求められる課題です。
- ・また、服部さんの報告の中で言及された有機農業に関する**PGS（参加型保障システム）**については、新しい運動の課題として今後拡がる可能性を秘めています。
- ・PGSは生産者・消費者・その他関係者（ステークホルダー）と一緒に協議し、お互いの信頼のもと有機農業を認証する。基準は、各国のオーガニック基準（日本ではJAS認証の基準）以上とされる。従って農薬・化学肥料不使用、遺伝子組み換え技術不使用はもちろん、自然環境・労働環境・家畜の飼養環境などへ配慮が必要です。

学校給食をオーガニックにするための実践的課題

- ・また白川町で実際に学校給食に食材を提供している**長谷川さん**の報告では、「**公共調達**」のいくつかの課題があきらかになっています。今後の課題となります。
- ・また有機野菜のデリバリー事業の**亀山さん**の各務原での実証実験「**C-SOAデリバリーコミュニティ**」の試みには、注目したいと思います。
- ・生活クラブ生協の**中野さん**のまとめでは、消費者と生産者との「**食べる約束**」等生協の原点としての食の安全への課題と、まとめとしての「**地域の中での実践として学校給食**」は大切な視点です。

学校給食をオーガニックに 署名活動はどのように始まったか

2020年11月、白川町での安田節子さんの講演がきっかけになりました。菱川さんは、それをただ聞き流すだけでなく、主体的に受け止めて、子供たちに安心できる食べ物を与えたいという思いから、第一回お母さんたちへのシェア会を開き、意見交換の場として11人のライングループを結成した。有機農業に関わるエキスパート、「有機農業を考える会」服部晃さん（岐阜県農政部農産園芸課から委託）未来を作る給食♡ぎふ：代表亀山さん、養護教諭：奥村理恵さん、なずな農園：武山さんと出会いも、運動の支えになりました。岡山県でお母さんたちが8000筆を集め県議会で採択されたことを知り、「学校給食をオーガニックへ」の署名活動をはじめることになりました。目標は10、000筆にし、子宝のさとLINEグループ11人の協力のもと、一緒に活動できる人、90人以上あつまり、短期間に13000筆以上集まりました。この間に「食を守る人々」上映会9カ所で開催できたのは、ここで集まった仲間の協力があったからでした。県会への採択へ、ただし紹介議員の関係で、いったん中止となり、再度請願をすることに。

これからの課題として

- ・ 分科会のための打ち合わせを何回か服部さん、菱川さんと行ってきました。当初の企画よりかなり課題が大きく膨らみ、実際に分科会全体では、それぞれの運動のつながり、連帯感のようなものを感じる事ができました。なんらかの形で継続した運動にできればと思います。
- ・ 「たくさんのすばらしい方たちとの出会い、いろんな経験。私の人生に宝ができた」という菱川さんの思い。これはクロストークの中でさらに語っていただければと思います。
- ・ 次の目標としては、署名活動でつながった多くの仲間たちとともに、実際にそれぞれの地域で、所属する自治体で学校給食をオーガニックにするという目標に向かって、また新しい出発があるように感じました。
- ・ まず、県議会での請願採択にむけての課題があります。

協同集会2021in東海 分科会

2021.12.26

「高校生世代における学習等支援の現状と課題を探る」

地域における子どもの学びの
支援共同研究会

事務局 橋本吉広

開催趣旨：2017年の協同集会を契機に、**中学生の学習支援の交流・検討を目的とする研究会が発足**し、今年は視野を広げ、小学生の学習支援(9月)、高浜市での小学生、中学生・高校生の一体的な学習等支援(10月)を取り上げ、**今回は「高校生世代」の学習等支援に焦点をあてた検討**をしました。

小学生・中学生と比べ、進路が多様化し、また教育格差もひろがる高校生世代では、その支援課題も多様化するため、

①高校生の生活実態を通し「高校生の貧困」についての理解を深め
②高校生世代への学習等支援の実践状況を明らかにし、
③高校での教育実践における困難を抱える高校生世代への取り組みの実際に学ぶことで、
これからの高校生世代の支援のあり方(その糸口)を探ります。



名古屋市「高校生世代の学習・相談支援事業」2016年度から24会場で開始され、2021年度には、市内150箇所543内訳：高1 年254人、2年174人、3年115人；ひとり親世帯405人、生活保護世帯101、生活困窮世帯37人)の参加で実施されています。
今回は、名古屋市からの委託事業2団体、自主事業1団体からの実践報告されました。

プログラム

9:30 **あいさつ** 地域における子どもの学び支援共同研究会の趣旨 研究会代表 南出 吉祥さん

9:40 **報告Ⅰ. アルバイト調査で見る高校生の貧困問題** 小島俊樹さん（日本福祉大学）

10:20 **報告Ⅱ. 「高校生世代の学習等支援」の現状 名古屋市など**

Ⅱ-1 名古屋市の高校生世代の学習・相談支援事業の実績 寺子屋学習塾 本田直子さん

Ⅱ-2 自主的活動としての高校生世代の学習等支援の実績 ポトスの部屋 江場勝吾さん

Ⅱ-3 名古屋市の高校生世代の学習・相談支援事業の実績(名古屋市の学校内サロン推進事業補助金によるサロン運営を含め) NPO法人こどもNPO 山田恭平さん

11:00 **報告Ⅲ. 高等学校における教育実践(中退・進路指導を含む)～高校教員の立場から**

堀 直予さん(愛知県立定時制高校)

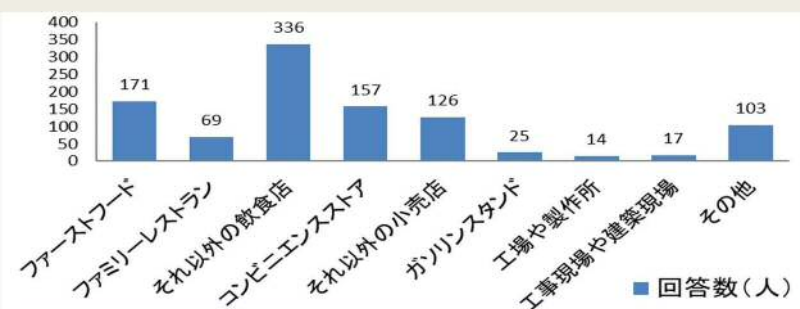
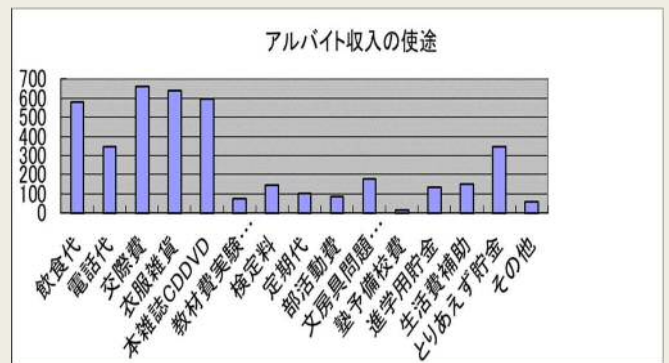
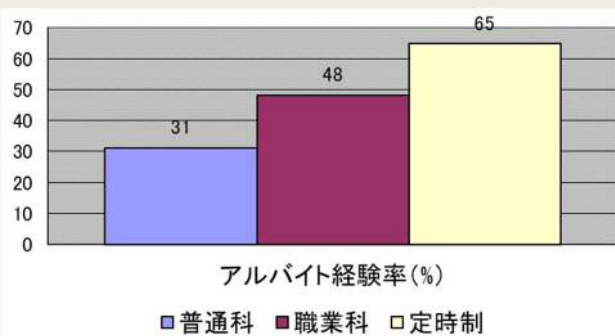
11:40 **Ⅳ【全体討論】 今後の高校生世代への学習等支援の課題と展望(筋道)を探る**

コーディネーター 南出吉祥さん（岐阜大学、研究会代表）

13:00 閉会

分科会は、オンライン開催で、地元以外にも八戸市・浦安市・静岡市・上田市・京都市各地から実践者・研究者など33名の参加で、活発な意見交換が行われました。

アルバイト調査で見る高校生の貧困問題



2010年10月～11月、名古屋市立高校を中心に県立・私立高校12校において、担任によりクラスの生徒に調査用紙を配布し、1752名分を回収した。

中学生の進路選択の変化

(参考) 全日制進学率の推移

区 分		2016 年度①	2021 年度②	②-①
進学希望率		93.9%	92.6%	▲1.3%
実 績 進学率	全日制	66,296	60,243	▲6,053
		90.4%	89.4%	▲1.0%
	定時制	1,464	1,170	▲294
		2.0%	1.7%	▲0.3%
	通信制	3,604	4,251	+647
		4.9%	6.3%	+1.4%

出典：愛知県立高等学校再編構想(案)
2021年11月

愛知県高等学校 設置者別の偏差値区分 (学科・コース区分別)

偏差値	県立高校	市立高校	私立高校	国立他	全体
70以上	2.7%	3.7%	1.4%	0.0%	2.2%
65-70未満	2.7%	11.1%	3.4%	0.0%	3.5%
60-65未満	9.4%	7.4%	6.2%	85.7%	9.4%
55-60未満	6.7%	0.0%	15.1%	0.0%	9.2%
50-55未満	9.4%	33.3%	13.0%	14.3%	12.4%
45-50未満	17.4%	22.2%	19.9%	0.0%	18.3%
40-45未満	41.5%	22.2%	33.6%	0.0%	36.6%
35-40未満	10.3%	0.0%	7.5%	0.0%	8.4%

出所：「みんなの高校情報」(愛知県・2021年版) より作成

高等学校における教育実践～高校教員の立場から

県立昼間定時制高校の役割

- ・ 基本的に、全日制に行けない生徒が入学するところ
- ・ 外国ルーツの生徒が年々増加
- ・ ひとり親家庭、困窮家庭がおそらく5割以上
- ・ 学びなおしの場
- ・ つながりなおしの場

高校を卒業する＝高卒の資格をとることの意義

- ・ 大学や専門学校への進学
- ・ 就職で「高卒以上」の求人にも応募できる
- ・ 「高卒」の給料体系
- ・ 「高卒」が必要な資格の取得
- ・ とりあえず多数派

困窮家庭の生徒への進路指導の実際

- ・生活保護家庭から就職→寮付きの仕事、免許がいる仕事
- ・生活保護家庭から進学→世帯分離が原則。早めに行政に相談し、進学のための貯金をする。使える奨学金はどんどん使う。
- ・デュアルシステムのある学校（観光業・調理・保育・介護など）を探るか、バイトしやすい条件の場所等を選ぶ。
- ・奨学金のある分野（介護・保育・看護）を選ぶ。
- ・入学金・入学時納付金の納入時期をにらんでお金の算段。学生支援機構の予約奨学金は5月入金なので間に合わない。
- ・就職は、最初の1か月の交通費と食費を貯めさせる。

高等学校における教育実践・進路指導などから「学習等支援」に期待すること

高校になくて地域にあるもの



高校生世代では、高校を拠点にした地域連携が大切か

こんな場所があったらいいな(妄想)

いろんな社会人と出会える	バイトができて、バイト後に勉強を教えてくれる	友だちと一緒に行ってOK ひとりで行ってOK
テスト前だけ助けてもらうことができる	夢を聞いてもらえる	大学進学のための勉強を教えてくれる。相談に乗ってくれる
送り迎えしてくれる	パソコンやタブレットを自由に使える、教えてもらえる	情報がいろいろあって、中退後、高卒後の進路の相談にも乗ってもらえる

学生・若者と協同を学ぶ

※テーマ・ゲストは協同集会と共通

A大学「ボランティア入門」

わいわい子ども食堂
学習支援NPOポトスの部屋 10名
 居場所 Caféわたぼうし
 ジュニア奉仕団とココボラ（学生の経験）

高齢者生協・ケアセンターほみ
難民支援と食料支援 70名

中山間地域の拠点 新城市・やなマルシェ
 行動する市民の力 NPOエム・トゥ・エム
 ボランティア経験 協同労働の働き方

高齢化する団地 くらしたすけあいの会
 都市近郊 ささえあいの家（八木山地区社協）
 人生100年時代 いなぶ健康アカデミー

小2で避難してきた大学生の近況
 原発事故と避難 対話と傾聴
 津波被害と避難 災害にどうむきあうか

B大学「協同組合論」

JAひまわり（産地）訪問～クリスマスに花を！
 フラワーアレンジをキャンパス・家庭で

地域と協同の研究センター向井忍

■日本はこれから「人口減少社会（生産年齢減少型・少子・超高齢・多文化社会）」に進みます。
 授業をうけて、あなたの仕事（職業選択）に関する考えを教えてください。（120名）

問1「これからの社会で、重視してほしい」と考える「仕事」 **（4つ選択）**

問2「あなたの考えや価値観、希望に近い」と考える「仕事」 **（4つ選択）**

設問	問1	問2
海外に進出し、国際的にも成長していく企業での仕事	50	35
国内に住む人々の、生活や消費力をたかめる仕事	79②	63③
高度な仕事を担えるAI（人口知能）、ではできない仕事	52	53
企業が求める「高度人材」や「柔軟な働き方」をする人材としての仕事	26	28
若者も高齢でも、男性も女性も、多文化（多国籍）で働ける仕事	100①	73①
多くの人があつまる三大都市圏に、営業所や本社がある会社の仕事	11	19
実家や家族の近くで、規模にかかわらず社会に役立っている会社の仕事	47	70②
自然に近い環境のところで、自分らしい生活設計ができる仕事	31	42
安定していると思われる、知られた企業や公務員としての仕事	28	52
地域・社会で、市民・企業・団体との協働を促進できるような仕事	73③	59
その他		
	289	494

高度人材・柔軟な働き方
 AIではできない仕事

安定

国内消費

海外・国際的成長

身近な地域

三大都市圏

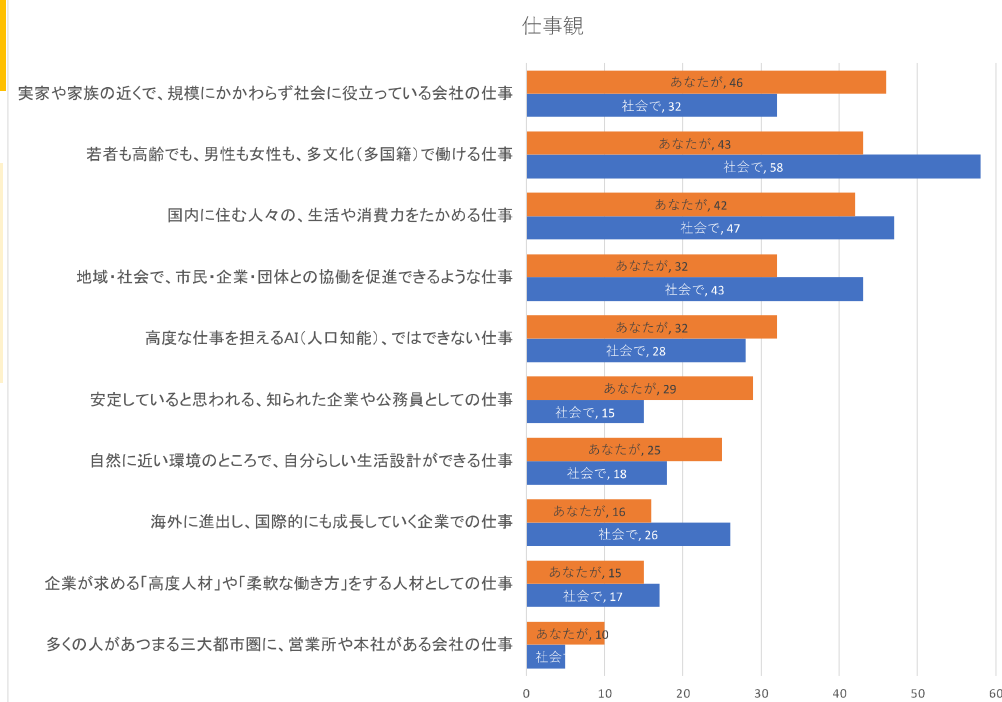
自然

協働を促進

多様・多文化な働き方

■仕事観の変化の有無（記述）
127名中

1：変化した	57（45%）
2：少し変化した	20（16%）
3：元々の考えに確信	16（13%）
4：変化するが考え方に影響	5（4%）
5：変化してない	22（17%）
NA	7（6%）



■問4：あなたの仕事観（問1と問2で選択した項目）は、この授業を受ける前と比べて、変化していると思いますか？それとも同じですか？

1：仕事をするにあたり、自分のなかでどう働くかということを考えていましたが、人のため、何かのためということが大切なのではないかなと思うようになりました。どうしても自分の働きやすい環境というのを重要視してしまいましたが、それもととても大切なことだと思いますがそこにプラスで周りのことを考えられると自分の中でより充実した働きかたができるとおもいました。

1：変化していると思う。仕事は報酬をもらうために行うものだと考えていたが、報酬をもらわなくてもやりたいと思える仕事に価値があり、ボランティア活動のように誰かの笑顔のために行うことが仕事の意義であると考えようになった。ボランティアの活動は拡大しており、ボランティアは独自の役割があるため会社がボランティアを主催し、実際に消費者と関わることも今後社会が行うべきことではないかとも考える。

1：私の仕事観は、この授業を受ける前と比べて変わったと考える。この授業を受ける前は、どんな職業でもいいから、自分でお金を稼いでそれなりに仕事が出来ればいいと思っていた。でもこの授業を受けて、地域に貢献した仕事が出来たらいいなと思うようになった。それはボランティア経験を通して人の居場所を作ることの大切さを学んだからだ。

1：変化したと思う。大学に入る前からAIなどの人工知能にはできない人の役に立つ仕事に就くことを目標としていた。しかし大学に入ってからの半年間将来のことについて考えずに単純作業のような日々を過ごしていた。夏休みもそうだった。しかし、本講義を受けて将来のことについて考える機会がかなり増え、難民食糧支援の箱詰め作業にも参加して自分の労力が人の役に立つことを以前よりも願うようになったからだ。

2：多少変化していると思います。とくに多国籍の人々が働ける環境というものの必要性を授業を通して強く実感したからです。

2：少し異なっていると思う。この授業をうけて、人との繋がりが生きていく上でどれほど大切なものなのかを理解できた。お金ではどうすることも出来ないことを繋がりによって解決できたり、乗り越えられることを沢山学べた。現在はコロナ禍でもあり、社会がこういった苦難を乗り越えるにはやはり、繋がりというものが大切なんだと実感した。

3：変わりません。周りに根底に役立ったり足になる仕事が出来たいと考えていたけれど、こんなにも知らないところでたくさんの方が活躍していたり困っている人がいると知った。

4：安定した職業に就きたいという考えは変わらないが、それを通して高齢者や障害を持った方の支えに少しでもなれる機会があったらいいなと考えるようになった。

5：あまり変化していないように感じる。しかし、自分が持っていなかった多くの意見を学ぶことができた。

難民食料支援に参加して 一受講生の感想

12月11日（土）箱詰め作業 9名に発送



12月14日（火）到着しての返信

ワカンタ出身 A さん(男性) :
写真(開封前) :
Wow, I received the packages. :
Thank you :
写真(開封後) :
Loss of words. :
DAN :
Great! We are all happy to hear that you're happy!! University students cooperated this time : Hope you'll enjoy :
A さん :
Absolutely :
For the students and everyone who participated and made this happens :
Thank you so much, all of us need a little help from time to time and when someone steps into lead a hand often they don't realise how much their help meant or how much it is appreciated. :



12月21日（火）報告動画をみて

- 活動して終わりせず、どうなったかその後の掲載してもらいありがとうございます。私個人としては受けているどの授業よりも学びが多かったと思っています。
- 羽田野さんから実際に届いたというお知らせを聞き私たちの思いが届いていると思うと嬉しく感じた。
- 難民食糧支援のボランティアは、どんなに小さくてもボランティアに関わる機会がいただけただけで感謝しています。
- 私は箱詰めなど当日は参加できなかったけど、授業に食べ物を持ってきて難民食糧支援に少しでも参加できたのは良かったです。
- ボランティアは、難民の方々をつなぐ役割を果たしているのだと思います。
- それぞれグループを作って話し合いながら作業できるのはとてもいいと思いました。
- 自分が思っていたより食べられないものに注意して仕分けをすることの大変さが分かったので、今度は食料やメッセージをもって仕分け作業にも参加して力になりたいと思った。

B大学「協同組合論」感想

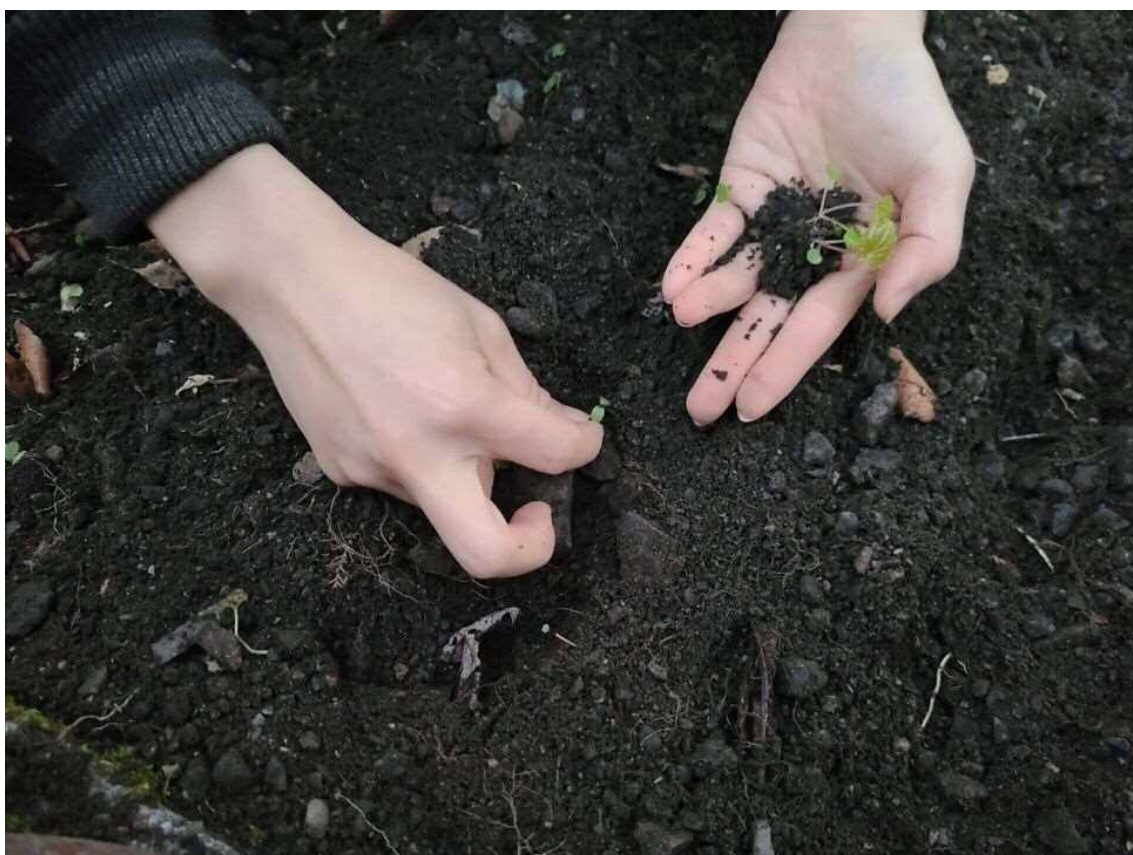
ゲスト講師ワーカーズコープ東海事業本部 岡田俊介さん

●協同して働くことについてのお話を聞き、資本に縛られた働き方ではなく自ら働くことでたくさんのことが得られることを感じました。実践例で居場所のない障害のある20代女性が児童館に来たけれど18歳までしか入館できないのでそのまま追いつ返すのではなく居場所がないからボランティアなら児童館にいてもいいんじゃないかということでその女性はボランティアをすることになり、そこからその女性の働きたいという気持ちから、その女性を取り巻く環境を考え、働く場を作ることで新たに困っている人を救っていているという話を聞いて一人の困ったから働く場を作るという良い連鎖が生まれたのは、**ただ支援するのではなくその人自身が自立していけるような環境作りがあったからだ**と思い、その人にとっての支援は過ごしやすい環境を整えていくことが大切であると考えました。

●仕事を通して地域課題解決と社会貢献をしていくということで、今の時代は便利な時代へと変化しているが、その変化についていけない人やあふれてしまう人も多くいるため、そのような人に寄り添いながら協同して働ける社会を目指していくことは非常に大切なことだと思う。**地域課題を解決するために仕事をすると、儲けることへの嬉しさだけでなく、人を助けることのやりがいを感じることもできるため、二つのやりがいを経験できる良い働き方だ**と思った。



クロストーク② 「多様性をいかす」



9月26日、協同集会 in 東海 多文化分科会をオンラインで開催、午前 68 名、午後 45 名の参加があった。

午前の部は、冒頭で多文化社会と協同組合として、日本の協同組合と世界の移民による協同組合、日本の多文化の現状についての紹介があり、次に、日本国籍のブラジルにルーツの若者の経験、ペルー出身で管理責任者のスタッフから愛知高齢者生協ケアセンターほみの事例をスペイン語通訳を通じて事例報告、学習支援の取り組みと地域連携の事例報告をいただいた。

昼の部は、愛知県行政職員から愛知県の多文化共生施策についてのコメント、大学生 4 名による日本語学習支援グループ J U N T O S の取り組み、そして Code for Coop の関係者から自動翻訳機能の使い方についてお話しいただいた。

午後の部は、中国帰国者と在日コリアンの対談、ブラジルルーツの子どもたちを対象とした放課後デイで管理責任者をしているブラジル出身の若者からの報告、アメリカと日本のハーフの若者からハーフであることと二重国籍について、そしてベトナム出身の元留学生からゆたか福祉会の職員として報告をいただいた。最後に、日本生協連の和氣さん、ワーカーズコレクティブの藤井さんからコメントをいただき、地域と協同の研究センターの向井さんのまとめで終了した。

中国帰国者で、ご自身の父親の介護と看取りの経験から「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」の活動を始めた王榮氏は「日本人である“私たち”と外国人である“あなたたち”この構図のままでは、いつまでもお互いの距離が縮まらない」、在日コリアンの李正光氏は「相違点ではなく、共通点を見出すことで人は共感し、関係が作られる」と話された。大学生 4 名による日本語学習支援グループ J U N T O S は、それぞれが異なる愛知県内の大学に通う学生たちによる、外国人集住地域の団地で海外ルーツの子ども達と共に学びつながら場を展開している活動紹介であった。この学生たち自身も日本で生まれ育った海外にルーツのある若者であり、多様な背景を持つ。

今回、協同集会のクロストークでお話をいただく山田れいなさんは、多文化分科会では、自分と向き合う対話のツールとして開発した「自己分析ノート」を紹介された。分科会開催から 4 ヶ月が経過して、現在は分析ノートの手法を他の人たちに伝えるための活動を始めている。

多文化分科会で報告をした一人ひとりの来日背景は、時々時代の政治や歴史、国の政策に大きく影響を受けている。それらからもたらされた困難や、人々の意識に苦しめられる経験も同時に共有されたが、困難や苦しみを乗り越えて、あるいは困難や苦しみの中にありながらも、ご自身の経験を、新しい価値や協同を生み出す力に置き換えていくプロセスが語られた。そのプロセスの中で生まれるダイナミックなエネルギーが、多様であることが生かされる豊かな社会を形づくっていくのだと思う。

2021 協同集会in東海

多文化分科会報告

9月26日 オンライン開催
午前の部：68名 午後の部：45名

地域と協同の研究センター 神田すみれ



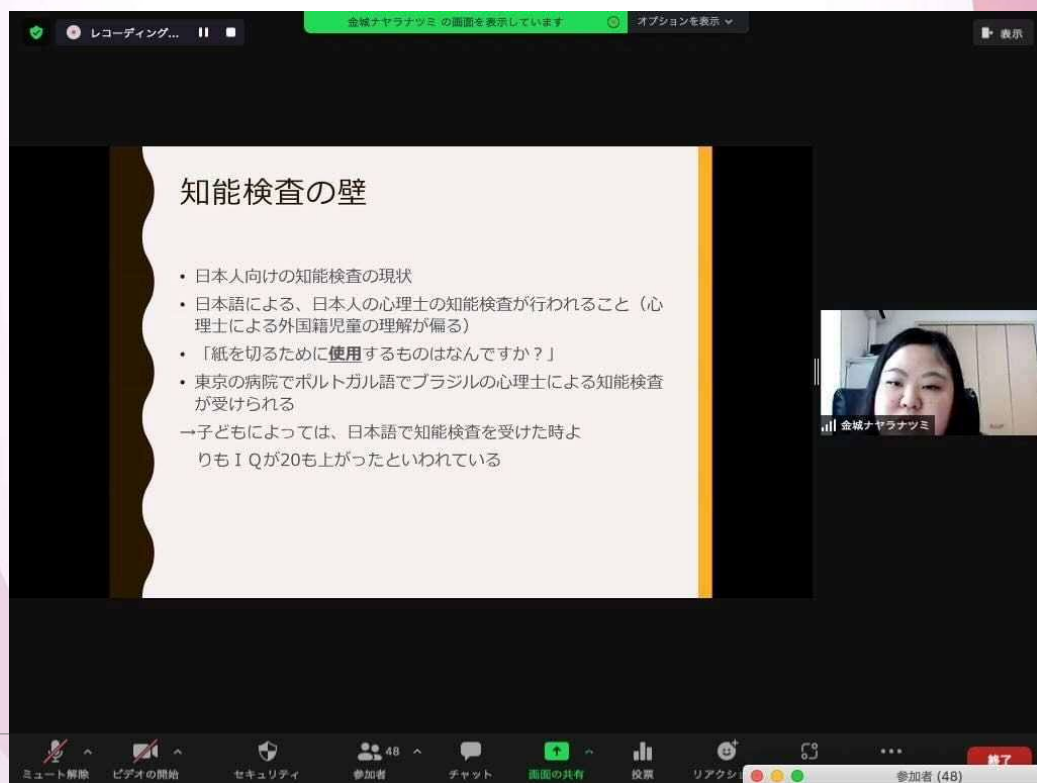
コリアンネットあいち事務局次長
外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト代表



愛知高齢者生協 ケアセンターほみ 管理責任者



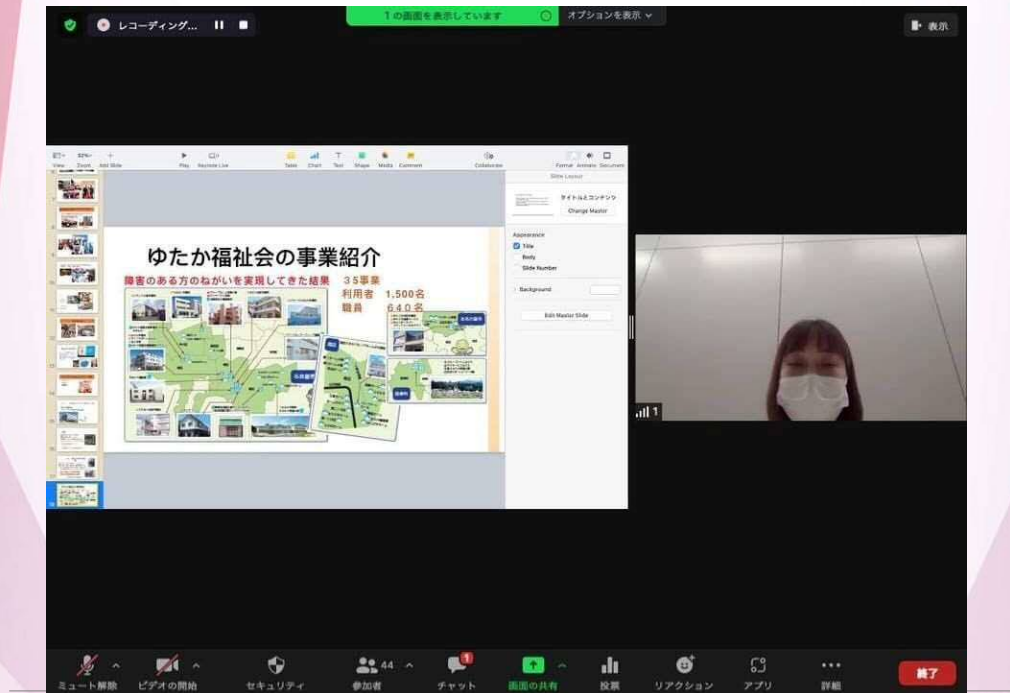
多文化ソーシャルワーカー・ポルトガル語通訳者・大学生



放課後デイ 管理責任者
多文化ソーシャルワーカー・ポルトガル語通訳者



英会話講師・英語通訳者



ゆたか福祉会職員



子ども達の学習支援・日本語支援

自動翻訳機能の紹介

Zoomにおける自動翻訳の方法

【ミーティングでUDトークを使って自動翻訳を実施】

UDトークのアプリをダウンロードしておきます。



- 基本的な機能は無料でも利用できます。
- zoomに接続しなくてもアプリだけで利用できます。
- UD=Universal Designの略です。
- リアルタイムの会話の自動翻訳だけでなく、文字入力の翻訳も可能ですので、筆談が必要な場合も利用できます。



来日背景

- ・時代の政治や歴史
- ・国の政策
- ・出入国管理

国の外国人受け入れ施策

1910-1945 在日コリアン（特別永住者）

1972年 中国との国交正常化 中国残留邦人の帰国（定住者）

1982年 留学生10万人計画（留学）

1980年代 アジア人女性（配偶者・興業）・中東（超過滞在）

1990年 入管法改正日系人（定住者）（1908年～日本移民）

1993年 技能実習制度創設（技能実習）

2008年 留学生30万人計画（2019年達成）

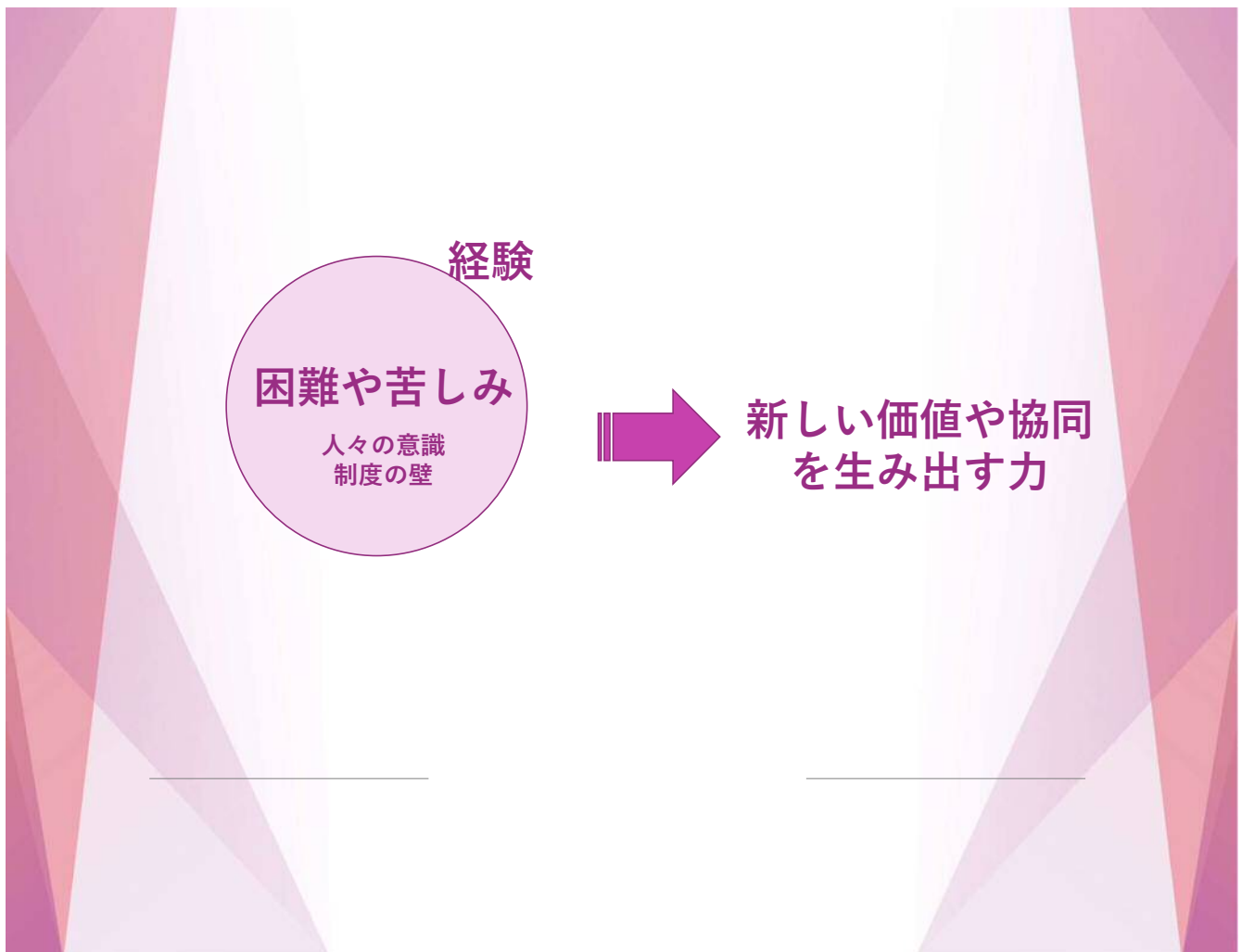
2010年 技能実習制度改正 在留資格「技能実習」創設

2012年 高度人材ポイント制導入

2017年 技能実習制度3年→5年 在留資格「介護」創設

2019年 在留資格「特定技能」創設（5年間で34万人）

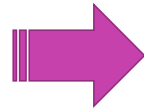
11



経験

困難や苦しみ

人々の意識
制度の壁



新しい価値や協同
を生み出す力

ダイナミックなエネルギー

多様であることがいかされる
豊かな社会を形づくる

「はたらくってなに?～働くを語り合おう座談会 2」報告

【概要】

- 主催：協同ではたらくネットワークあいち
- 日時：10月31日（日）14：00～16：00 オンライン開催 参加：50名
この座談会は2021協同集会 in 東海の分科会に位置づけされます。
- 進行：愛知県高齢者生活協同組合の藤井克子さん、わっぱの会の荻野直人さん
- 開会挨拶：愛知県高齢者生活協同組合の藤井克子さん
- 趣旨説明：愛知ワーカーズ・コレクティブ藤井恵里さん「協同して働くことで、働くを変える、地域を変える」ということと、法施行の状況、愛知の動きを話されました。
- 座談会登壇者：ワーカーズコープ東海事業本部の岡田俊介本部長、わっぱの会の戸高保照さん、ケアセンターほみの米須ファビオさん、前田康行さん、越俣彰浩さん

【発言内容】

- 戸高さん 大学の時の施設実習ではノルマをこなす感じだった。わっぱを見学し、利用者と職員の関係を見て、最初は何とかなければという感覚もあった。実際には共に働くことは居心地が良い。一緒にやれる仕事を探しながら、進めている。利益と理念の両立を考えている。20年前、販売が厳しい時期、作業できなくなった人もいた。
- 米須さん 倉庫の仕事と掛け持ちでケアの仕事をしていて、人を助けることができることにやりがいを感じる。
- 岡田さん ワーカーズに入る前の仕事について、お客さんから会社は信頼していないが、岡田さんのことは信頼しているという言葉に考えさせられた。協同労働について、合わない人、主体性に価値を置いているが、価値を感じない人もいるかもしれない。そうした人たちとも協同する。
- 前田さん ITの仕事の中で、大事なことが大事にされない現状がある。本質的でなく、会議でうまいこと言う人が評価され、トップ全体が無能に感じる。生きることについて考え、農業にたどり着いた。より正しい社会を作りたい。現代の社会に安易に貢献することは危険である。農業を中心に正しいものを作る人のネットワークを作りたい。

【まとめ：金城学院大学朝倉美江教授】

新しい働き方と地域づくりが求められる中でこの座談会が開催される意義を話され、登壇者の発言を整理、「共に働くことの価値と事業継続のための利益のバランスを考えながら取り組んでいる」「長く共に働くことが大切」「清掃の仕事は命を守るエッセンシャルワーカーである」「話し合いを面倒くさいと思う人もいれば、面白いと思う人もいる」「役に立つ仕事をして、より正しい社会を作りたい」「差別・偏見をなくしたい」。協同労働により自分と他人、自分と地域について考え、視野が広がる。ピョートル・クロボトキンの『相互扶助論』の中の「助け合った種族が生き残った」という言葉が好きである。競争し、壊し合い、気候危機に陥っている中で、平和で助け合う社会を作るため、協同労働を広げることが大切。

「はたらくって何？ 働くを語り合おう座談会」報告

～協同ではたらくネットワークあいち

日本労働者協同組合連合会（ワーカーズコープ）
センター事業団
東海事業本部 本部長 岡田 俊介

2021協同集会in東海
2022/1/23

2021/4/24
協同ではたらく
ネットワークあいち
設立フォーラム

働く人が自ら出資し経営参画

**「協同労働」推進へ
ネットワーク発足**

働く人が自ら出資し、経営に関わる「協同労働」という新しい働き方を実現する「労働者協同組合法」が昨年末に成立したのを受け、この考え方を推進する県内の団体が集まり「協同ではたらくネットワークあいち」を発足させた。初のイベントとして記念フォーラムを開き、働き方の変革だけでなく地域社会づくりにも役立つなど労働者協同組合（労協）の持つ可能性について議論した。NPOに次ぐ新しい市民活動のあり方としても注目されそうだ。（大森雅弥）

5団体加盟 名古屋で記念フォーラム



労働者協同組合法は、労働者が出資し経営に参画する労働者協同組合を設立する法律。昨年末に成立した。県内では、この法律に基づき、働く人が自ら出資し、経営に関わる「協同労働」という新しい働き方を実現する「労働者協同組合法」が昨年末に成立したのを受け、この考え方を推進する県内の団体が集まり「協同ではたらくネットワークあいち」を発足させた。初のイベントとして記念フォーラムを開き、働き方の変革だけでなく地域社会づくりにも役立つなど労働者協同組合（労協）の持つ可能性について議論した。NPOに次ぐ新しい市民活動のあり方としても注目されそうだ。（大森雅弥）

「協同ではたらくネットワークあいち」は、労働者協同組合（労協）の推進を目的として設立された。加盟団体は、愛知県高齢者生活協同組合、愛知ワーカーズ・コレクティブ連合会、一般社団法人しげんカフェシステムズ、特定非営利活動法人のわみサポートセンター、特定非営利活動法人わっぱの会、日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）センター事業団東海事業本部、金城学院大学人間科学部朝倉美江教授ら。フォーラムでは、労働者協同組合の意義や、働く人が自ら出資し経営に参画するメリット、デメリットなどについて、各団体の代表者が登壇し、パネルディスカッションが行われた。また、労働者協同組合の推進に向けた課題や、今後の取り組みについて、各団体の代表者が意見を述べた。フォーラムは、多くの参加者で賑わい、労働者協同組合の推進に向けた議論が盛んに行われた。

第1回 労協の意義

労働者協同組合とは、労働者が出資し経営に参画する労働者協同組合を設立する法律。昨年末に成立した。県内では、この法律に基づき、働く人が自ら出資し、経営に関わる「協同労働」という新しい働き方を実現する「労働者協同組合法」が昨年末に成立したのを受け、この考え方を推進する県内の団体が集まり「協同ではたらくネットワークあいち」を発足させた。初のイベントとして記念フォーラムを開き、働き方の変革だけでなく地域社会づくりにも役立つなど労働者協同組合（労協）の持つ可能性について議論した。NPOに次ぐ新しい市民活動のあり方としても注目されそうだ。（大森雅弥）

労働者協同組合法成立 を受けて発足

- ・愛知県高齢者生活協同組合
- ・愛知ワーカーズ・コレクティブ連合会
- ・一般社団法人しげんカフェシステムズ
- ・特定非営利活動法人のわみサポートセンター
- ・特定非営利活動法人わっぱの会
- ・日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）センター事業団東海事業本部
- ・金城学院大学人間科学部朝倉美江 教授

協同ではたらく ネットワークあいち

「協同ではたらくネットワークあいち」 が目指すもの

- ・「働くこと」と「働き方」を問い直します
- ・雇用労働ではない働き方、「協同ではたらく」ことを地域に拡げます
- ・様々な困難を抱えた人と「ともに働く」ことを目指します
- ・働くことを地域づくりにつなげます
- ・地域で「協同ではたらく」実践をつくります

→「協同ではたらく」ことを拡げる

→そもそもの「働くこと」「働き方」について深め合う場を
20代～40代を中心に語り合う座談会を開催

3

2021/7/17
第1回座談会



- ・上から直接具体的にやれと言われることが少なく、現場に任せてもらえる、自由度がある
- ・全員が責任をもって仕事をするために、1人1人がアイデアを出し、皆で職場をつくっていく
- ・働くことに必要なことは誰かの役に立っている実感
- ・「同僚」ではなく「仲間」
- ・惹かれたのは、能力主義ではなくみんなで稼いだお金を必要に応じた分配をすること
- ・100%ではなくとも、話し合いを続けていくことが大切

2021/10/31 第2回座談会



- ・障がい者とともに働くことは支援をしていると思われるかもしれないが、障がいを持っている仲間に助けられることもある
- ・これからの社会を考えヘルパー講座を受講、ケアの仕事は人の役に立っている実感がやりがい
- ・以前の営業の仕事は、その人に本当は必要でないものを売ることによって稼ぐことにより自分の生計を立てていたが、今では自分の仕事の社会的な意義を考えるようになった
- ・業界のトップの利益のために物事が進み、本当に大事なことが大切にされず、全く本質的でなく立ち居振る舞いの上手い人が評価される、そんな構造の中では働きたくない
- ・資本主義の大量生産大量消費、分業により働きづらさ暮らしにくさが生まれている、需要は本当に必要なものではなく、利益を上げるためにつくられた要らないもの、そういう社会に貢献したくない

座談会まとめ

- ・働くことがしんどい社会と言われているけど、「協同ではたらく」ことを広げることにより夢を持てる可能性を感じた
- ・自分という存在は色々な関係の中でつくられているおり、稼ぐ・成長するということだけではない価値を感じた
- ・格差が広がっている、稼ぐ・効率が重視され過ぎていることで壊されている物がある中、自然や社会、時間軸、空間軸が人を豊かにする、協同ではたらくことが信頼を紡ぎ直すのでは？
- ・そもそも社会自体は再分配が不可欠だが、資本主義が行き過ぎている
- ・「協同ではたらく」ことにより自分と他人、自分と地域について考え、視野が広がる
- ・ピョートル・クロポトキンの『相互扶助論』の中の「助け合った種族が生き残った」という言葉の通り、競争し、壊し合い、気候危機に陥っている中で、平和で助け合う社会を作るため、「協同ではたらく」ことを広げることが大切である

クロストーカー？ 紹介

荻野直人さん

わっぱの会所属、30代半ばの男性

- ・ 惹かれたのは、能力主義ではなくみんなで稼いだお金を必要に応じた分配をすること
- ・ 「生きていること自体が労働」…介助者がおむつを替えるときに腰を浮かすことも労働
- ・ 働くと生活が分かれることに違和感がある

「協同ではたらく」

→働く仲間と協同する＋地域・社会とつなげた協同

ご静聴ありがとうございました

市民が主体者となる

協同労働 という働き方

「労働者協同組合法」成立をうけて



労働者協同組合法は2020年12月4日、第203回臨時国会において、全会一致で成立、同月11日に公布されました。これより2年以内に施行されます。

法律のポイント

目的

多様な就労機会の創出、地域の多様な需要に応じた事業を行うことで、持続可能で活力ある地域社会の実現

平等性

議決権、選挙権は出資口数にかかわらず一人一票

非営利性

- ・剰余金の1/10以上を準備金として積み立て
 - ・1/20以上を就労創出等積立金として積み立て
 - ・1/20以上を教育繰越金として繰り越し
- このことにより非営利性を担保（出資配当なし）

労働者性

組合は組合員との間で労働契約を締結する（労働者保護の適用）

設立登記

3人以上の発起人により定款を作成、創立総会を経て設立、届け出ることで登記、成立できる

組合員

出資をして、組合員となり、事業に従事する（準則主義）

人数要件

総組合員数の4/5以上の組合員は事業に従事
事業に従事する者の3/4以上は組合員

事業

労働者派遣事業は不可、それ以外はどの産業、どの領域も可能

行政庁による監督

個別の組合：都道府県、連合会：厚生労働省

他法人からの組織変更

企業組合法人またはNPO法人は施行後3年以内に、総会の議決により（準則主義）、その組織を変更し、組合になることができる

第1条 目的

この法律は、各人が生活との調和を保ちつつその意欲及び能力に応じて就労する機会が必ずしも十分に確保されていない現状などを踏まえ、組合員が出資し、それぞれの意見を反映して組合の事業が行われ、及び組合員自らが事業に従事することを基本原理とする組織に関し、設立、管理その他必要な事項を定めること等により、多様な就労の機会を創出することを促進するとともに、当該組織を通じて地域における多様な需要に応じた事業が行われることを促進し、もって持続可能で活力ある地域社会の実現に資することを目的とする。

? 協同労働とは

協同労働=働く人が、出資をして組合員となり、それぞれの意見を反映させながら主体的に運営し、地域の多様な需要に応じながら、持続可能な地域社会づくりに向けて事業を行う働き方です。

出資



- 出資することで経営への責任感をひとり一人がもつ

→「わたしのお金」から
「みんなのお金」へ

意見反映



- 徹底した話し合い
 - どんな事業計画をたてるか
 - 給料は？経費は？
- 方針はみんなで

労働



- よい仕事の追求
 - ひとり一人の能力個性発揮
 - 働く機会の創出
- 主体性の発揮

♡ 協同労働の神髄

ともに生き、ともにたたく。誰一人とり残さない社会。協同労働の力は、仲間同士の協同にとどまらず、地域とも協同し、新たな地域課題にはそれを解決する仕事を協同でおこす、そこに神髄があります。

● はたらく仲間と

お互いの個性を認め合ったり、活かしあうような関係性の中で協同しながらはたらく。協同、連帯の力がはたらくことの原動力です。

● 利用する方たちと

利用者のニーズを大切にしながらも、サービスを提供する側、される側という壁を越え協同することを大切にします。

● 地域のみなさんと

地域全体を巻き込み、地域で創り上げていく。市民主体のまちづくりがここから生まれます。

💡 おもな事業分野



高齢者



子育て



食



施設運営



林業



ビルメン



就労支援



農業



市民

事業分野は基本的に自由に行うことができます。（労働者派遣事業はできません）具体的には、現在「協同労働」に取り組む団体が、高齢者介護事業、保育・学童保育などの子育て支援事業、農業や林業などの一次産業、住宅関連・清掃・管理など、地域において多様な需要に応じて事業を行っており、同様の事業が行われることが想定されます。市民の活動の場は無限大です。



求められている働き方

- 非正規労働者（パート、アルバイト、契約社員、派遣社員など）2千万人を超え、労働者数の約4割にまで広がっています。
- ディーセントワーク「働きがいのある人間らしい仕事」の実現を、自らの労働条件を定められることに期待されています。
- SDGs「誰一人取り残さない、持続可能な地域社会」をめざして、環境を中心に社会・経済が循環する、生活と地域を焦点に事業・社会連帯活動に取り組んできました。



諸外国の状況

- 協同労働を行う労働者協同組合は全世界に約400万人が活動（国際組織CICOPA加盟数）

- 労働者協同組合に関する法制度（G7）



G7で日本だけ、法制度がなかったら

- 日本では1980年代以降、協同労働を模索する動きが加速



他法人との違い

労働者協同組合

準則主義
出資・運営(意見反映)・
労働が一体となった組織

NPO法人

認証主義
市民による社会貢献活動
出資は認められていない

企業組合法人

認可主義
営利目的
出資は認められている

シルバー人材センター

臨時的、短期的
一定の収入が保障されて
いるわけではない



期待の声

- 「協同労働はまさにこれからの時代に合った働き方ではないかと。これからは、地域の問題を地域の皆さんで解決していく時代です。地域で自分が活躍し、生き生き働いていくための生き方としては、最良のモデルだろう。」
(田村憲久 厚労大臣・与党協同労働の法制化に関するワーキングチーム座長)
- 「労働者協同組合の制度は職業選択を多様化し、SDGsやダイバーシティ、地域包括ケアシステム、新たな介護システム創設にも大いに貢献される素晴らしい制度。市町村、都道府県を問わず、地域それぞれの課題解決に大きく寄与し、地方創生第2幕に無くてはならない制度である。」
(飯泉嘉門 徳島県知事・全国知事会会長)
- 「人口減少、少子化、高齢化が進み、大規模災害、そしてコロナ禍と、ますます先行きが不透明な社会となる中で、多様なニーズに応じた新たな働き方の選択肢が増え、地域活性化につながる労働者協同組合の存在は、とりわけ地域社会において一つの大きな希望となり得る。」
(神津里季生 労働者福祉中央協議会会長)
- 「この組織には若さを感じる。今の世の困りごと、多くの人がどうしたものかと思っていることにまっすぐに立ち向かうからだろう。JCAとしても、協同組合間をしっかりとつないでいき、微力を尽くしていきたい。」
(比嘉政浩 日本協同組合連携機構代表理事専務)



目指す地域社会

人口減少、ポストコロナ社会において、次の社会づくりを目指します。

- 都市集中型から分散型の社会に
- グローバル経済からローカルでの循環型経済に
- 「協同・共生の文化」を社会基盤に

だれもがこの社会の主体者となり快く働く時代を、みんなで力一杯切り拓いていきましょう。

ひとりの想いから仕事生まれる。

想いを重ねる、仲間が集まる。

地域で必要とされる仕事をつくる。

自分たちの地域を持続可能なものにしていく。

いま、市民が主体的となる「協同労働」が労働者協同組合法成立によって実現します。

あなたのまちでもはじめませんか？

田園回帰と地域おこし 協力隊・集落支援員

協同集会イン東海 分科会報告
「地域の中で働く—小さな協同の実践と仕事作り」

分科会テーマ

山県市の最北端の小さな集落地域の方や 行政、仲間と協同して行う地域づくり

【報告】やまがたフットバス実行委員会

山口晋一さん

- 山口さんは、2014年の協同集会の分科会「自然がつなぐ人と人 都市と農村」にも参加、集落支援員としての活動や、始まったばかりの農家レストランの活動などの報告や、いくつかの抱負も語られました。今回はそれから七年目の多様に広がった活動が紹介されました。
- 山口さんは2002年にIT企業にプログラマーとして就職しましたが、2011年に退職。NPO活動に参加しながら2013年4月集落支援員として地域での活動を開始。

山口さんの活動歴

2013年4月 集落支援員として活動開始

10月 舟伏せの里へおんせえよお〜開業。

2016年6月 集落支援員【兼任】公民館主事 北山茶アルバイト

2017年4月 やまがたフットパス実行委員会代表

舟伏せの里へおんせえよお〜代表

フォトグラファー開始

8月 体験紹介サイト 山県ツアーズ 公開

2018年4月 移住受け入れグループに参加ー商工会 社協、自治会連合会その他NPO法

人など十二団体参加。このうち美山ベースキャンプ副代表として活動。

2021年6月 レンタル・コワーキングスペース「神崎よってちょ」オープン

その他集落戦員として雨乞い太鼓保存会に参加。その他地域資源として「葉わさび」や「川海苔」生産加工の開発や、また個人として古民家を改造して「水音」というゲストハウス建築中。

小さな集落での協同のネットワーク

- 北山の『舟伏せの里』のレストランでは、地域の高齢者が主体になって運営されている。調理する女性はこの地区にすむ住人の方で、過疎地域での活動の可能性を示している。
- また、地域にある資源(葉わさび、や川海苔)の活用や、伝統文化の保存など、活動の幅は大きい。
- 移住受け入れ(田園回帰)の取り組みも山県市全体の取り組みとなっている。「地域おこし協力隊員の協力を得ながら、都市住民との交流活動が定着しつつある。やまがたフットパス実行委員会、美山ベースキャンプの仕事など。
- 課題として、山口さんが関わる団体は任意団体として、まだ法人格をもっていない。継続性のある収入を得るためには、どのような法人格がいいのか検討中。もうすこし積極的な行政の関わりも必要。
- ここで、主として農村地域での時代状況の理解や、山口さんの活動の理解のためその背景となるものを紹介したい。以下は下記の本からの引用です。

「農村政策の変貌ーその軌跡と新たな構想」小田切徳美著



平成30年間に三つの時期に分ける 平成前期(おおよそ1990年代)

1991年 限界集落論(大野)

- 投機を目的とした開発の嵐 ホテル、ゴルフ場、スキー場(またはマリーナ)の3点セットの大規模リゾート施設 地域活性化の「切り札」
- このブームはバブル経済の崩壊とともに一気にしぼみ、リゾート構想の多くは頓挫した
- リゾート法により国立公園や森林、農地における土地利用転換の規制緩和が図られたため、開発予定地が未利用地として荒廃し、その国土の大きな爪痕として、今も残されている

平成中期(おおむね2000年代) 地域づくりの発生とその普及

1999年食料・農業・農村基本法と2000年中山間地直接支払い制度

- 地域づくり運動の展開、しかし逆方向として平成の大合併。
- 地域振興の「内発性」の協調
- 多様性 地域の実情を踏まえた多様性に富んだとりくみ 福祉や環境等を含めた総合型 革新性(イノベーション)
- 都市農村交流活動が積極的に行われた「棚田」みなおし 棚田百選 棚田オーナー制度(積極的な都市農村交流)、棚田サミット棚田学会等。
- 「都市農村交流の鏡効果」 ゲストとホストが学び合う「交流産業」

平成後期(おおむね2010年代) 田園回帰と関係人口の顕在化

- 2009年民主党政権発足。総務省「地域おこし協力隊、集落支援員」制度発足
- 田園回帰の動き 20～30歳の移住者の増加 さらに女性比率の増加
- 増田レポート「地方消滅論」(2014年)
- 内発性・多様性・革新性を特徴とする地域づくりの実践が若者を中心とする移住者を引き付けてきた 地域に「よそ者」として参加し、農山村を動かしている 「地域づくりと田園回帰の好循環」 この中心にるのが「地域おこし協力隊」と「集落支援員」
- 「関係人口」という考え方 「関わりの段階」①地域の特産品の購入②地域への寄付(ふるさと納税等)③煩雑な訪問(リピーター)④地域でのボランティア活動⑤準定住(年間で一定期間居住 2地域居住)

農山村地域への補助金等

- 農水省 1999年食料・農業・農村基本法 中山間地直接支払い制度
この制度で棚田の維持再生に寄与 2015年食料・農業・農村基本計画
多面的機能支払い (戸別所得補償 安倍政権で消滅)
- 内閣官房 地方創生にかかわる各種交付金
- 総務省 過疎債(ソフト事業) 特別交付税措置(地域おこし協力隊 集落支援員)

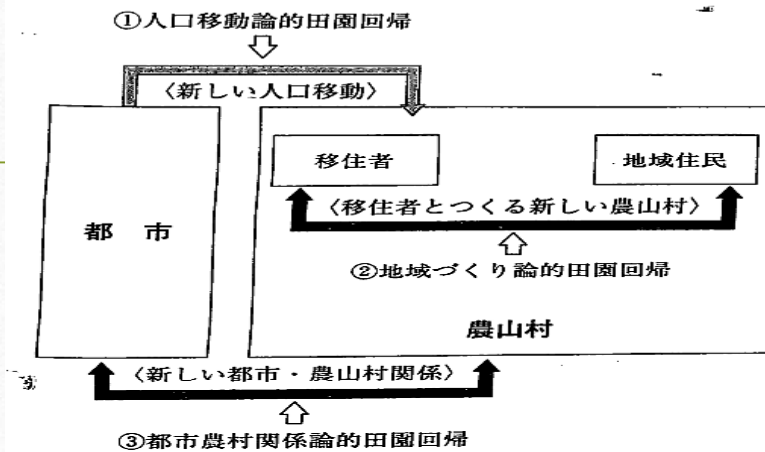


図 5-3-1 3つの「田園回帰」(概念図)

注) 小田切徳美・筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来』
(農山漁村文化協会、2016年)、21頁より引用。

第5部 地方創生下の農村—動き出す人びとと地域

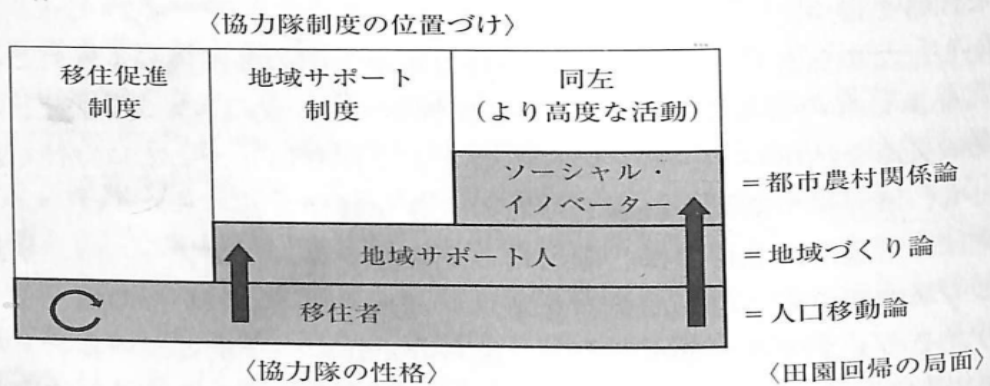


図 5-3-2 地域おこし協力隊の多様性と制度

Iターン Uターン 孫ターン？

- Iターン 地域おこし協力隊 Uターン 集落支援員
- 孫ターン 集落からの他出子の子のIターン NHKドラマ「あまちゃん」
新しい動き 郡上市和良町T型集落点検活動
- 「ナリワイ」という生き方 大がかりな仕掛けを使わず、生活の中から仕事を生み出し、仕事の中から生活を充実させる。そんな生活をいくつも創って組み合わせていく—移住者の多様化のなかで生まれてきた多様な移住動機、多様な職業選択。

農山村に求められる対応—地域と自治体

- 「定住の長期化」にむけて、家族単位でより長期間定住するためには、家族のライフステージに応じた課題の対応必要。子供の成長に応じたもの、小中学校や大学進学とその費用をどうするか。
- 移住者に対する政策支援は「移住」に集中して、長期化という政策上の関心が薄い。移住者家族のライフステージに応じたサポートが議論されるべき時期にきている。国も自治体も。

福祉医療ネットワークと地域 共生社会

協同集会in東海 分科会報告
分科会「福祉医療ネットワークと地域共生社会」
会場:「ひなたぼっこ」の「こひなた」

分科会プログラム(2:00～4:00)

- 1. 認定NPO法人中津川福祉医療ネットワークの活動紹介
(小さな協同の連携)ネットワークづくり 理事長 岩田知子さん
- 2. 認定NPO法人「ひなたぼっこ」の歩み 理事長 大橋利恵子さん
- 3. 協同労働としての「ひなたぼっこ」の実践はどこまで進んだか
斎藤啓治さん

小さな協同の大きな挑戦

- 2000年に生まれた「ひなたぼっこ」は、最初から小さな協同が前提であり、その協同のネットワーク化も同時に目論まれてきました。小規模多機能「こまんば」を拠点とし、隣接する診療所の訪問医療を核として、2010に生まれました。地域の中で、生活全体を支える、ケアする体制ができました。
- 各現場からの課題や問題は、学習と情報の共有化により、たとえば「認知症の方への傷害保険」等、制度を変える大きな力となっています。またこのネットワークの大きな土台となっている「ひなたぼっこ」の20年の歴史に、貫かれているのは民主主義に支えられた協同労働の追求でした。

中津川福祉医療ネットワークのひろがり





中津川福医療ネットワーク参加/市内9団体

協同労働はどこまですすんだか

- 大橋理事長の報告の中にあった高齢者のいきいきとした表情の生きる意味を感じる明るさ。それを支えているのはスタッフの「こころの声」を聴くといった日々の実践にあるようです。そして現場からの声は、制度をかえる大きな力になりました。24時間の介護ヘルパー制度、また短時間労働にたいする補助や、日中の一時支援の報酬や交通費の補助等。
- 協同労働の、同一労働同一賃金といった、差別のない働き方は、雇用労働という条件と、理事会に権限をどうするかという課題を含み、それは必ずしも今回のワーカーズ法では解決されていない、というのが斉藤さんの見解でもあります。

心していること

協同労働について 心してること

福祉課題と地域とのかかわりを意識しているか<市民協同>
経営全般、職員処遇など、決めるまでのプロセスを大切にしているか<民主的管理>
制度課題など目を外にむけつつ、足元の経営を改善し続けているか<経営責任>
少数意見、欠席者、小さな提案を尊重しているか<民主的手続き>
速やかに情報が伝わっているか、会報誌は定期的に発行されているか<研修・広報>
各種会合が必要から 自発的に、定期的開催されているか<運営管理>



外圧に抗して...

私たちの取り組み

